

# 小林 時三郎

こ ばやし とき さぶ ろう

学位の種類 経済学博士  
学位記番号 経第 14 号  
学位授与年月日 昭和 44 年 6 月 12 日  
学位授与の要件 学位規則第 5 条第 2 項該当

学位論文題目 マルサスを中心とする古典派  
経済学の研究

論文審査委員

(主査)

教授 末 永 茂 喜

教授 田 中 菊 次

助教授 服 部 文 男

## 論文内容の要旨

本論文はマルサスを中心とする古典派経済学の解明を目的としている。

その研究の方法として、まずマルサスの人口論の研究を出発点とし、次いでかれの経済学の理論体系の解明にすすみ、さらに、かれを取り巻く経済学者の体系との関連を明らかにするとともに、かれの学問体系が後の経済学にどのような影響を与えているかの点にも考慮を払うという方法をとった。しかし、現在のマルサス研究がマルサスの思想的基盤を軽視する傾向があるので、その点に反省を加え、かれの経済学体系の特殊な性格をその点から分析し、ケーンズ経済学の想源とされているマルサス体系のケーンズと異なる思想的基盤およびかれが古典的伝統を受けついでいるなどを解明するのが、提出者の現在の研究目標である。ただし、この最後の研究は未公表であり、本年十月頃までに印刷公表の予定である。

右の研究方法に基づいて提出論文および参考論文が構成されているが、提出論文はその主要なものに限った。人口論の研究部分は参考論文とした。

### A 「古典学派の考察」の内容要旨

#### (1) 経済学史上におけるリカードウ正統

経済学史上におけるリカードウ経済学の伝統の重さをエデンバラ評論などの当時の雑誌の普及性の面から一考した。もちろん、リカードウ経済学の理論的優越性やその知的権威および

び産業資本の成長という社会的条件の成熟がその内在的理由をなしていたが、ややもすれば忘れられがちな当時の知的雰囲気、リカード 正統という一点に焦点をあて、マルサスと比較しつつ明らかにしようとした。

#### (2) リカード利潤論の形成とマルサス

リカード利潤論は、従来、いわゆる穀物法論争をきっかけとして形成されているといわれたが、それはボナー編の「リカードのマルサス宛への手紙」(1887年)において日付が誤記されていることに原因している。本論文は、リカード利潤論は、マルサスとの通貨問題をめぐる論争過程から形成されてくるゆえんを明らかにしようとした。

#### (3) マルサスにおける『人口論』と『経済学原理』

本稿は有効需要の概念を手がかりとしてマルサスにおける人口理論と経済学体系との関連を明らかにしようとした。この二つの体系は、その政策上の結論において、矛盾していることを明らかにしている。すなわち、前者においては、政府の節約、救貧支出の節減、倹約の奨励、早婚の延期を主張しているが、後者においては、公共事業、個生産的消費、節約の非奨励などを結論している。しかし、これはマルサスにおける人口思想が経済学という現状分析へとすすむにつれて生じてくる矛盾であって、マルサスの根本的な思想体系は変化していないように思われる。本稿ではこの点まで言及していないが、前出未公表論文でこの問題を考察している。

#### (4) マルサスの移民論

本稿はマルサスの人口論に基づく移民論をたんなる理論としてではなく、当時の実際政策との関連において明らかにしようとしたものである。そのさいホートン宛マルサスの未発表の書簡を手がかりとした。ホートンは国家補助による植民計画の副案者であったが、ウエークフィールドは移民者自身による負担を主張した。マルサスはウエークフィールドにたいする限りホートンと同意見であったが、移民による空席は一時的救済にすぎず、人口法則にしたがってまもなく満たされてしまうと考える点で、ホートンとちがっていた。この争点をめぐって、トレンズ、シーニア、ミルなどの諸家の見解にも若干ふれている。結局、この1823年から1831年までのマルサスの書簡によればマルサスの人口法則に基づく移民論の基本的見解はほとんど変化していないことが明らかである。

#### (5) 1830年代におけるマルサス人口理論

本稿は1830年代におけるマルサス人口理論の退潮の事情を、リカード、シーニアとの関連において取り扱い、ブレースを先駆者とする新マルサス主義の抬頭、他方における賃金基金説の定着という学史の流れを要約して叙述した。特に争点を取りあげたものではない

が、提出者の『マルサス人口論綱要』（昭和34年）におけるマルサス人口論研究を継受発展せしめようと意図したものである。シーニアのマルサス批判に特に留意した。

#### (6) セエ法則にかんする若干の覚書

本稿は学史上のいわゆるセエ法則をセエの著作から若干の検討をなし、その経済理論において有する意味について要約したものである。しかし、これはあくまで覚書であって研究上の基礎作業として叙述した。マルサスとの関連におけるセエ法則は(三)の論稿で論ぜられている。本稿では、セエ法則を、経済現象における一般的均衡の傾向を表現するもの、貯蓄・投資均等を主張するもの、経済発展のウイジョンをあらわすものという面から把握しているが、(三)の論文ではもっと具体的に取り扱った。

#### (7) ロバート・トレンズの生涯と業績

トレンズにかんする邦語文献が少ないので、その欠を補う意味でかれの生涯と業績とを素描した。かれの主要な著書の概要を紹介したが、リカードウ、マルサスとの関係についても若干ふれている。イングランド銀行の発行機能と銀行機能の分離説は重要な論点であるが、深く言及していない。結局、トレンズは、第一級の経済学者でなかったが、第二流のなかでは無視しえない存在であると結論した。

#### B マルサス初版経済学原理とリカードウのマルサス評注

本稿は、マルサス初版経済学原理（1820）の成立の事情を明らかにしたもので、そのためにリカードウとマルサスの往復書簡を主として手がかりとした。その1834年の第二版との異向にも言及しているが、リカードウの評注の形式的な面にもスラファの全集を参考にして解説を加えた。この論稿は、多少の修正を加えて、『マルサス経済学原理』（岩波書店刊）の下巻解説の一部として収録した。

#### C マルサスとセエ法則

本稿は、マルサスにおける有効需要、マルサスにおける小生産的消費、マルサスのリカードウ批判、マルサスのセエ法則批判、マルサス理論の意義の五項目に分けて論じている。マルサスにたいする批判は多いが、蓄積の進行は投資の過剰をもたらし、社会的消費力を相対的に衰えさせるという論理を明らかにしたところに意義がある。ケーンズとの関係から考察しているが、ビグーによるこのセエ法則の公準をケーンズが事実によって否定したことにも及び、マルサスとケーンズ経済学との接続を考察した。リカードウとセエ法則との関係にも言及しているが、ランゲによるセエ法則の批判やコリーのマルサスとケーンズとの関係にたいする異説なども紹介した。提出者のこの最後の点にかんする詳細な見解は未公表の前出論文に述べられている。

#### D マルサスの地代論

本稿は、序説、マルサスの農業観、地代論の前史、マルサスの地代論、マルサスのリカードウ批判、地代論形成の若干の吟味の六項目に分けて論じている。マルサスの地代論はかれの人口論に直接続くものであるから、かれの農業観や社会発展観をはじめに明らかにした。それによってかれの保守的性格や思想が検討され、その上でリカードウ地代論との異同が論ぜられている。この二人は同じ差額論を展開したが、後に、農業における改善をリカードウは「コスト低減的」と考え、マルサスは「生産物増大的」と考えた。前者は一つの流れをつくったが、後者も地代概念の拡張の方向に流れた。マルサスの地代概念が、近代的地代概念への接近の萌芽と解することができるという点が提出者の見解である。さらに、マルサスは「生産物増大的」と考えるから、これを流通せしめるために増大する貨幣量が必要とする。ここに、マルサスが本質的にインフレーションニヨニストとしてあらわれなければならない理由をみいだす。増大した生産物、これによる地代の増大、その結果としての有効需要の増大、経済の繁栄という論理は遠くマルサスの思想的基盤に由来するというのが提出者の見解である。この最後の点の詳細は未公表の前出論文で取り扱っている。

#### E 補論

なお、提出者は左記を発表予定としている。

##### (1) マルサスの価格論（文経論叢昭和43年9月刊）

限界効用理論との関連で論じたもの。1800年の『食料高価論』を主として取り扱う。

##### (2) 『マルサス経済学の方法』（未来社刊予定）

マルサスの思想的基盤に考察の焦点をあて、思想と理論との関係に論及した。中庸主義という西洋伝統の倫理的徳目が経済理論のモチーフとなっていることに関心が注がれ、マルサス経済学体系の特殊性の一つをそこにみいだす。ケーンズの想源という常識とは若干ちがっていることを考察した。四百字詰原稿用紙300枚。

### 論文審査結果の要旨

題名	公表の方法	公表年月日
(1) 古典学派の考察	未来社刊	昭和41年2月
(2) マルサス初版経済学原理 とリカードウのマルサス 評注	文経論叢	昭和41年12月

題名	公表の方法	公表年月日
(3) マルサスとセエ法則	文経論叢	昭和42年11月
(4) マルサスの地代論	文経論叢	昭和43年3月

参考論文

題名	公表の方法	公表年月日	冊数
(1) マルサス人口論綱要	未来社刊	昭和34年	1
(2) マルサス経済学原理	岩波書店刊	昭和43年	2
(3) 発展の経済学序説	野田経済社刊	昭和40年	1

全体はトマス・ロバート・マルサスの経済学体系を解明し、さらに彼を取り巻く経済学者たちの体系との関連を明らかにしようとしたものである。特にマルサスの「人口論」を顧慮し、また彼の思想的基盤を立ち入って顧慮したことは、大きな特色と言ってよい。

学位4論文の主な内容は次の通りである。

(1) 「古典学派の考察」

計7章から成るが、理論的に中心となるものはマルサスにおける人口理論と経済学説との間のいわゆる矛盾の解明、およびマルサスの移民観の研究である。これに、リカドウの利潤論の形成におけるマルサスの役割に関する新しい事実の研究、経済学史におけるいわゆるリカドウ正統形成の諸事情、マルサスの移民論とウエークフィールド、ホートン、スーニア等のそれとの関係、1830年代におけるマルサス人口理論退潮の諸事情等の研究が配されている。

(2) 「マルサス初版経済学原理とリカドウのマルサス評注」

テーマが3あり、リカドウとマルサスとの往復書簡を主な手がかりとしてマルサスの「経済学原理」初版(1820年刊)の成立の事情、第2版(1834年刊)と初版との異同、およびスラッフア編集リカドウ全集を資料としてマルサスに対するリカドウの評注が研究されている。

(3) 「マルサスとセエ法則」

全篇5節より成り、ビグー、ケーンズ、ランゲ等の研究の成果を取り入れて、資本蓄積の進行は投資の過剰をもたらす、相対的に社会的消費力を衰えさせるという論理を明らかにしたところに、マルサスの理論の意義を認めている。

(4) 「マルサスの地代論」

全篇6節より成る。マルサスの地代論をリカドウのそれと詳細に比較し、その特殊性をマルサスの特異な農業観や社会発展観から説明している。

マルサスについては未解決の問題が少なくないが、本論文の提出者はそのいくつかに始めてメスを入れたものである。そして学説の批判には必ずしも十分でないものがあり、研究の方法にも反省すべき点がないとは言えないが、学説の諸側面は精密に取り上げられており、歴史的  
研究も忠実綿密である。

以上審査するところによって、本論文の提出者は経済学博士の学位を授与されるに十分な資  
格をもつものと認められる。